

を大字湯野上に接する。東に小野岳（標高一三八三・四m）、西に神籠ヶ岳（標高一三七六・三m）・鳥帽子岳（標高一〇九五・四m）などに近接した山間部に開けた集落で、標高は六五八mを測り、東側を小野川が流れ、上流には大内ダムがある。

大内地区は、阿賀川支流である小野川流域に開けた集落である。近世には、会津若松から下野国今市に至る下野街道の宿場村として発達した。北は大内峠・氷玉峠を経て関山宿（現在の本郷町）、北西境の市野峠を経て市野村（現在の会津高田町）に至る街道が分岐している。

天和三（一六八三）年に地震による山崩れで下野街道の五十里宿（現在の栃木県藤原町）が水没し、交通不能となり元禄八年に南山松川通りが開かれると下野街道の交通量は激減した。享保七（一七二二）年五十里湖の水抜けによって街道が復活したが、すでに主要道は白河街道に移っていた。

古代以前の状況については不明な点が多いが、大内地区では五箇所の塚や散布地が発見されている。大内・権現上・火矢陣原遺跡は縄文時代の散布地、歳神遺跡は奈良・平安時代の散布地である。

四、調査の方法

発掘調査は、以前に実施した試掘調査の所見から、重機によりアスファルトを除去した後に人力で用水路跡に堆積した土砂を取り除いた。堆積土は長年道路として利用されていたため、堅くしまり困難を極めた。調査区は、旧水路底面中央に10m置きに釘を打ち込み、北から10mごとに1〜31区とした。

調査の記録は、原則として20分の1の縮尺で作成し、試掘調査のトレンチは、AとSとして断面図を作成した。遺物は各調査区

ごとに出土地点・層位・レベルを記録して取り上げた。土層の記録は、用水路内堆積土が算用数字、遺構外堆積土はLとローマ数字を組み合わせて表示した。写真は6×4.5判のモノクロームフィルムその他に35mmのモノクロームフィルムとカラーリバーサルを用いた。

五、旧水路跡

今回の発掘調査は、平成三年の旧用水路確認調査や平成四年の水道管掘り方調査で明らかになった水路跡について全面的な調査を実施した。調査地点が現在も観光客を含めて地元では重要な通路として利用されており調査区の幅は限定された。調査区は幅二・五m・全長三二五mで、調査面積は約八一三m²を測る。

調査では主に用水路の掘り方を確認し、さらに石組を中心に平面図・側面図・遺物のドットマップを作成した。石組が良好に遺存していた地区は、北から1区東側・2区東側・3区・9区西側・10区・15区・24区東側・31区のみで、旧水路に使用されていた河原石はすでに抜き取られおり、聞き取り調査でも旧水路の廃棄・埋設の段階で、新しい水路の石組みとして再利用されていたことが確認された。12区・14区・19区・23区・24区は石が散乱しており、用水路埋没時に石組を取り外して破壊した可能性がある。また、水路跡は、底面が深くなり、かつ石組の膨らみから洗い場と想定できる箇所が4〜10・12〜15・17・19・20・22〜31区で確認される。

断面の観察では、試掘調査のために設定したトレンチで土層図を作成した。水路幅が狭くなる地点もあるが、平均して50cm前後を測る。構造では側面に径が30cmの川原石を置き、裏込め石の小石を使用している地区もある。底面はほぼ平坦で、細かな砂が薄